

知っておこう!

健康診断の

監修:石川 隆氏
丸の内クリニック 院長



第22回

ウン?・ホント! 腹部超音波検査

40歳の会社員、健(タケシ)さんは妻、康子(ヤスコ)さんと健診の結果報告書について話をしています。今回は健康診断における腹部超音波検査の意義について考えましょう。

1 健康診断の腹部超音波検査ではどんなことが分かるの?

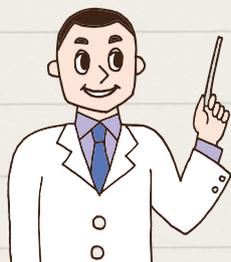
健康診断で腹部超音波検査という検査があるけれど、どんなことが分かるのかしら?

ヤスコ
康子さん
主婦(35歳)



腹部超音波検査は超音波を使っておなかの中の臓器を画像で映し出すんだ。肝臓や胆嚢、膵臓、腎臓などが検査できるそうだよ

タケシ
健さん
会社員(40歳)



人間ドックなどで行われている腹部超音波検査は、一般健診といわれる労働安全衛生規則に基づく健診の項目には含まれていません。しかし短時間で受けられるため受診者の身体の負担も少ないうえに、肝臓や胆嚢、膵臓、腎臓などの臓器に腫瘍などができていないかスクリーニングできる点で簡便な検査といえます¹⁾。

その検査法の長所と短所を理解しておきましょう。

腹部超音波検査は米国のUSPSTFではこれまで医学的にスクリーニングの有用性についての十分なエビデンスは示されていませんが、日本の人間ドックにおいては検査項目として必ず付いている検査です。

腹部超音波検査は身体の表面に超音波を発信する探触子(プローブ)を当て、臓器に反射して返ってきた信号を画像化します。一般的な腹部の健診で調べる場合、対象となるのは肝臓、胆嚢、膵臓、腎臓、脾臓などの臓器です。管腔臓器といわれ、中に空気が入っているような胃、小腸、大腸などの臓器は空気やガスの影響で臓器が正確に描出できないため一般には腹部超音波検査によるスクリーニングには適していません。

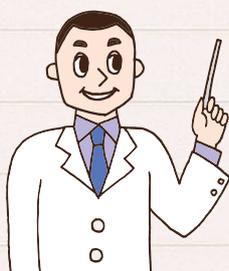
一方、腹部以外に表面から描出可能な臓器である甲状腺、乳腺、前立腺などは超音波での検査が可能です。

肝臓がんのリスクが高い集団である、B型肝炎・C型肝炎ウイルスに罹患している人に対する定期的な腹部超音波検査の有用性については、英文論文を含め数多くの報告がありますが、一般の人に対するがん検診としての腹部超音波検査の有用性についての報告は、まだ十分にはありません。

腹部超音波検査では
どのような病気
が見つかるかしら？



実はがんが見つかる頻度は
それほど多くないらしいよ。
しかし健康診断では無症状の
段階で見つけやすく、早期発見
には貢献しているそうだね



腹部超音波検査ではしばしば
病気とはいえ肝臓の血管腫
や嚢胞、胆嚢のポリープ、腎の嚢
胞や石灰化、結石、血管筋脂肪
腫といった所見が観察されるこ
とがあります。

これらは生まれつき持ってい
たり、徐々にできたりしてそれ
自身病気に進むことのないものが大部分です。例えば良
性の腫瘍である肝血管腫は時に肝臓の悪性腫瘍との鑑別
が必要なこともあります。ほとんどの場合、腹部超音波
検査で特徴的な所見が認められます。

胆嚢ポリープも5mm未満のものはさほど大きさが変わ
らない場合が多いので、1年に1回の健診で、腹部超音波
検査を受ければ精密検査などしなくても十分と考えられ
ます。

腹部超音波検査が早期発見に有効な悪性腫瘍には肝臓
がん、胆嚢がん、膵がん、胆管がん、腎臓がんなどがあり
ます。肝臓がんは日本では80%以上がC型肝炎あるいはB
型肝炎に感染している人に発症するので、一般の健康な
人での発症率は低く人間ドックなどで見つかる確率はそ

れほどでもありません。

膵がんは胆嚢がんと同様に、近年わが国で罹患数・死亡
数ともに増えている疾患です。腫瘍の進行が速いため早
期診断が大変難しく、1年前の腹部超音波検査で所見がな
くても、あつという間に進行がんになってしまうという例
がしばしばみられます。膵がんの早期診断はまだ課題
が多いといえますが、昨今、膵管拡張や膵嚢胞が膵がん
の危険因子として明らかとなってきています²⁾。

一方、比較的進行の遅いがんである腎臓がんは腹部超
音波検査で発見されることの多いがんです。腎臓の半分
くらいががんに冒されていても自覚症状がないことが多
いのですが、健診の腹部超音波検査で早期に発見され
た後、手術で治癒させることも可能です。

腹部超音波検査では良性的所見はあまり心配せず、健
診後精密検査を勧められる所見があったらなるべく早く
にほかの画像診断であるCT検査やMR検査を受けること
が大切です。

参考文献:1)腹部超音波がん検診 基準. 日本消化器がん検診学会雑誌.

49: 667-685, 2011

2)田中幸子, 他. 膵癌高危険群としての膵嚢胞, 主膵管拡張, 肝胆膵

62: 519-524, 2011

腹部超音波検査で発見される良性所見:血管腫や嚢胞^{のうほう}

腹部の超音波検査では良性的所見が高頻度にみられます。な
かでも表に示す所見は、膵嚢胞以外は10%前後みられてそれ
自身病気とはいえません。とくに肝臓の血管腫(皮膚の赤あざの
ように血液がプールした状態)や嚢胞(袋状になって中に液が
貯留している状態)、腎嚢胞は頻度が高くほとんどの場合、超音
波検査での診断が可能で精密検査は必要ではありません。

まれに肝臓の血管腫か肝臓の悪性腫瘍かで鑑別を必要とされ
る場合や、腎臓の良性的血管筋脂肪腫か、それとも腎がんかを鑑
別しなければならぬ場合があります。胆嚢ポリープも5mm未
満の小さなポリープはしばしば(10%前後の人に)見つかり

が、多くの場合、腹部超音波検査で定期的に経過観察するに留ま
ります。胆嚢結石も年齢が上がると数十人に1人くらいはみられ
る所見ですが、症状を伴わない結石(サイレントストーン)は通常、
経過観察するだけでいいでしょう。

表 腹部超音波検査でしばしば発見される良性疾患

肝臓	嚢胞、血管腫	膵臓	嚢胞
胆嚢	ポリープ、結石	腎臓	嚢胞、血管筋脂肪腫

Mini
Column